こしやの光

指歸の卷

前編

新紀の祝禱……一
無題……三
今日晨朝に佛の救世大慈父を念ぜよ……五
佛の救世大慈の父を念ず……六
佛説無量壽名号大事因緣經に曰く……七
釋尊を通じて彌陀を信ず……八
本真の慈父を戀ひ慕ふ……一〇
無題……一一
一りの大ミオヤを戴く世の同胞衆に告ぐ……一三
無題……一五
光明主義……一六
宗教の必要を感ぜぬ人に示す……一八
佛とは覚者……二一
光明主義に就いて……二三
道友其工学士の質疑に答ふ……二五
小島尊宿の質疑に答ふ……三一
発刊の表白……三六
発刊の旨趣……三七

後編

成所作智の二面……四一
禪定……四七

新紀の祝禱

大みおやの清き光の裡に新らしき年を迎へたる我等同胞は、無量壽のいと目出度き聖名をたゝへて祝し奉る。如來の聖寵を被むり、みおやの光明に活ける我等は新たに改まりたる元日より此の年を盡してみおやの聖旨に契ふやう、又みおやの光榮を現すべく勤め得らるゝやうに加被力を仰ぎ奉る。

惟みるに舊き〳〵太古の昔より新しく〳〵朝な〳〵に昇る旭の光いと目出度し。世にすべての物の中、最と古き太陽は毎朝新らしく東の天に生れ出づる太陽ほど新しきものはない。古き〳〵太陽が新らしき光を浴びかけるから地上の萬物は何時も新らしく生るゝことを得る。絶對界の如來の光明は太陽よりは猶舊き久遠塵點劫の過去際より、普ねく十方法界を照して念ずるものゝ心靈を新らしく生れさせて居る。偖て太陽によりて活かさるゝ地上の人類は朦昧の時代より開明に進むに隨つて人爲的の燈光は

行燈よりランプ、ランプより電燈と云ふやうに漸次に進み來た。然れども太陽の光は萬代に易らない。心靈上の光明に於ても人爲的の傳道法や説明などは時機に依て必ずしも同一でない。然れども人の心靈を照す太陽の光は昔も今も同じ南無阿彌陀佛の光明である。舊き〳〵南無阿彌陀佛の日光の外に一切衆生の心靈を新らしく生れさする法はない。

視給へみおやの清淨と歡喜と智慧と不斷との光明は一切萬物の中に表現されて居る。天の新鮮なる清き澄氣は清淨光の表れにて蒼海の潮に面を洗ひながら昇る旭の圓かなる笑顔は、いかにも歡喜光を現はして居る。日東天に昇りて普ねく乾坤を照らし萬物炳然と現はるゝは是れ智慧光の表れである。陽威赫々として一切萬物に活力を施すは是れ不斷光の表現と云はん。萬物の中にみおやの光明加はらざるものなし。實に稱歎すべき哉、宇宙に萬物の設備を以て我等同胞を惠み給ふ。みおやの聖意は我等同胞の心靈を活かし永遠の生命とし、みおやの全きが如くに全からしめんとの聖意なりと信ず。我等は新たに與へられたる年月日時を重んじ、聖意に契ふ務めを以て聖寵に報ひ奉らん。こゝに謹んで新紀を祝禱すること如是。

○

爾時に世尊諸根悅豫に滿る姿色の清らかに光顏の巍々たる御相を尊者阿難は佛の聖旨を承けて座より起ち右の肩を脱ぎて跪き合掌して佛に申上げた。今日世尊よ御身の悅豫に滿ち姿色の清らけく光顏の殊ら巍々たること明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如く、實に輝き給ふ威容世に超て比なく未だ曾て是の如き殊妙なるを瞻覩奉らざりき。然り世尊よ今日世尊は奇特の法に住し、今日世雄よ諸佛の所住に住し、今日世英よ最勝の道に住し、今日天尊よ如來の德を行じ給へり。過去未來現在の一切の諸佛は

相念じ給ふ世尊も亦諸佛を念じ給ふならん。如是の威神の光々たること何故ぞと。是に於て世尊阿難に告げ給ふ。阿難よ諸天が汝に敎へて此の問をなさしめしや自ら慧見を以て斯く問ふや。阿難佛に曰さく諸天が來つて我に敎へるにあらず、只我が見る所に從つて此義を問奉るのみ、佛の給はく善哉阿難問ふ所甚だ快し、深き智慧を發して眞妙の辨才あり衆生を愍念み給ふが故に此の慧義を問へり。如來は無盡の大悲を以て三界を矜哀み給ふ所以に世に出興て光く道敎を闡き眞實の利を以て群萌を拯ふ。是れ無量劫にも値ひ難く見難し。靈瑞華の時ありて出づるが如し。今問へる義は世を饒益する所多く一切の衆生を開化す、阿難よ當に知るべし如來の正覺は其智量り難く導御く所多し慧見碍りなく、すべてを知り給ふ。一喰の力を以て能く億百千劫の無量の壽命を住し給ふ、身根悅豫にして毀損せず、姿色永へに麗はしく光顏變ずることなきは其は如來は定慧究暢して極まりなし、一切の法に自在なればなり。阿難よ諦に聽け今汝が爲に說かん。』

今日晨朝に佛の救世大悲の父を念ぜよ

佛敎の通法として毎朝必ず六念を誦す。六念の中先づ第一に佛の救世大慈の父を祈念せよと敎られてある。佛を念ずれば他の五念は其中に攝りてをる。佛敎信者は、今日一日はみおやの賜たる貴重の時間を空しく費さぬやうに、聖旨に契ふ務めを果すべきやうに深く心に懸くべき爲に朝起きて直に此の祈念をなせよとの御示である。先づ朝起きたならば澡浴清淨にしてみおやの在ますべる處なきが故に今現にこゝに在すことを深く信じ、恰も朝日の輝く如きのみおやの威神と慈悲との光明を以て今現に照さるゝ我身たるを信じて、眞正面に在すみおやを敬禮し奉り即ち南無阿彌陀佛の尊き御名を稱へて、アナタの御力と御惠みとに依りて活き働くことを得たる我等は都てを獻げて仕奉らむ。願くはアナタの聖旨に契ふ務めを果さるゝやうに加被力を垂れ給へとの意を以て我は同朋衆と共に祈り上らむ。

此身は全くアナタの有と信じて一日勤むる時は我等が我儘ものも光明の中に敬ふ處の念を以て己れを制裁する力となりて聖旨に契ふ務めを爲し得らるゝなり。依て朝に祈るは、今日一日の愼しみを盟ふためである。

佛の救世大慈の父を念ず

大慈悲なるミオヤよ、あなたは光明遍ねく十方界を照して念佛の衆生を攝取し給ふ。我等衆生の愚蒙なる、ミオヤの聖意の在す處を知らず自ら聞きに迷ひて苦を受くること極まりなかりし。ミオヤの大慈悲子等を愍み給ひて、昔法藏菩薩として世に出で給ひ深重なる慈悲を以て若しも苦海に沈む子等を救はん爲にはたとへ身を阿鼻極熱の火に燒かるとも寧ろ甘受して忍んで終に悔じとの子を愛する聖意を現し給ひぬ。又近くはミオヤの子を愍れむ聖意を示さんが爲に釋迦牟尼佛として此の世に出まして、世は悉く我が有にして其中の衆生は皆是れ我が子と曰ひ、凡ての子等が爲にミオヤの慈悲に便るべき眞理を敎へ給ふ。即ち昔し法藏菩薩と現れ給ひし時の誓願なる十方衆生よ、至心にミオヤを信樂して聖意の中に生れんことを望みて聖名を稱へて專ら念ずる時は光明中に生るべし、との聖旨を示し給ふ。

我等は深く聖意を信じ、光明中に生れて日々の靈の糧を與へらるゝやうに聖名を稱へてミオヤの恩寵を仰ぎ奉つる。

佛說無量壽佛名號利益大事因緣經に曰く

世尊阿難に告て曰く、如來の世間に興出し給ふ所以は彼の佛の不可思議眞實功德の光明名號利益大事因緣を說かんが爲なり。此故に我れ說く値ひ難く見難く得難く聞き難しと。若し衆生ありて此法を聞くことあらんものは皆應に信順して如法に修行すべし。

世尊阿難に告て曰く、彼の法藏比丘十方世界の一切有情を度せんが爲に超世の願を起し無量の大行を修すと雖も、是れ本久遠實成本有法身常住の無量壽佛にして、不可思議の威神力を以ての故に十方世界に遍滿して無數の有情を敎化し安立せんが爲に、無上眞實の道に住して、或は刹利國王轉輪王となり或は長者居士豪性尊貴となり或は六欲梵天王等となり或は地獄餓鬼畜生修羅身となり常に四威儀を以て一切を化作し給ふ。

阿難彼の久遠實成法身常住の無量壽佛は豈異人ならんや今日の世尊我身是れなり。

釋尊を通じて彌陀を信ず

東の空に昇りて冴かに照らす滿月の皎々たるは、西の空に入りて人の目に見えぬ日光の反照である。

斯の地上に出まして人類の心の靈を照す釋尊の覺りの光は即ち西天の淨界に在して光明遍く十方を照し給ふ彌陀無量光の反映である。釋尊は人の身を以て斯土に御出ましなされたものゝ御本身は、常寂光の都に在ます無量壽尊なので一切衆生の大慈父である。故に宇宙は我が有にて其中の衆生は悉く我子と啓示なされた。常に絶叫して一切の子等が爲に敎ふるに、一心に念佛し慈父の光明に觸れて靈に復活して現在より永恒の光明に入るべき眞理を宣傳し給ふた。

娑婆の舞臺に出でては釋尊なれども淨界の樂屋に入りて見れば即ち無量壽如來である。

我等は釋尊の敎に隨ひ、彌陀の光明に觸れ清められたる人となり、身心共に安らけく歡喜踊躍の日暮しを爲し、與へられつゝある靈力を以て聖旨に契ふやう努力し、愈々命終れば釋尊の御跡を慕ふて光明永へに輝く大慈父の御許に歸り、常時常恒の慈恩に報酬し奉らん。

是れ釋尊を通じて彌陀を信じ一切の同胞衆と共に現在よりも永遠の光明に入らんと

欲する所以である。

本眞の慈父を戀ひ慕ふ

「闇の夜に鳴かぬ烏の聲聞けば、生れぬ先の父ぞ戀しき」此の道歌は一休和尙の歌と傳られてをる。此の意は我等は今人間に生れ出しも、我が心靈が何れより來りしとも知らず、又死して何れに趣向すべき哉を識らず、闇より闇に彷徨ふ凡夫である。然るに先覺者なる釋尊の敎たる經文を閲て、初めて我等は無明を父とし煩惱を母として生を受けたるもの、其先きの迷ひ出でぬ昔の本覺眞如の都に自性天眞如來と云ふ眞の父の在ますと聞てより、心の奥底に潛める靈が喚起されて連りに天眞のミオヤが戀しくなりしと云ふ事である。

讀者諸君よ斯の冊誌が即ち鳴かぬ烏の聲である。諸君は久遠劫來御別れ申たる眞の慈悲のミオヤが戀しくは有らぬか。法華經に一心に佛を見んと欲して身命を惜まず其の心の戀慕するに依て佛は出でゝ爲に說法すと。眞の慈父に値ひ奉らずば成佛は得られぬと云ふことを聞く時は愈々慈悲のミオヤが慕はしくなる。然らば云何にせば信認することを得らるゝとなれば、若しくは瞑想に神を凝らして眞のミオヤに相見せんと欲し、若くは聖名を喚で覩奉らんと欲して至心不斷なる時は、自己の奥底に潛める靈性が喚起されて微かにも靈光に接することを得ん。若しも焉に至らば愈ミオヤを戀くし想はざるを得ぬ。實に慕はしき哉、大ミオヤ。

○

「空海が心のうちに咲く花は彌陀より外に知る人はなし」世に此歌は弘法大師の道詠と傳へられてをる。何人の歌でもよい此道詠の如くに信心の花が開く時はミオヤの彌陀に知らるゝ人と爲る。さうなれば此方からも眞にミオヤを信じて中心から彌陀を慕はしく感じらるゝやうになる。宇宙は本より大ミオヤの所有である。總ての生る物は皆其子である。然れども生れたまゝの人は佛の卵である卵のまゝではミオヤの在ます

ことを知ることはできぬ。ミオヤの慈悲の懐にあたゝめられて信心の心が孵化る時始めてミオヤの愛護を被るやうに爲得らるる。然らばいかにせばミオヤの慈悲にあたゝめらるゝやとなれば經にミオヤの慈悲の光は普ねく十方の世界を照せども念佛するものゝみを攝取して捨てたまはぬと。我ら念佛してミオヤの光にあたゝめられて信心開けて佛の雛子と爲ることができる。已にそうなる時はナムアミダ佛と啼く聲にミオヤの慈愛はいつでもうけてをる。雛がピヨ〳〵と鳴く音に親鳥はコツコと呼びかはすやうになる。かように我等信心開く時はミオヤに知られてをる人となる。卵のまゝでは親の愛のうけやうはない。願はくば我同胞の衆よ、疾く信心の心を開きて佛の雛となりて彌陀より外に知る人はなしと自信の立つように爲てミオヤを慕ふ子としてミオヤの愛護の下に價値ある日ぐらしを爲すようにならまほしきに御すゝめ申すにぞ。

一リの大ミオヤを戴く處の世の同胞衆に告ぐ

我等は人の子であると共に如來のミ子である。人の子であるから一切動物欲の上に我欲を以て有ゆる罪を造る。卽ち地獄を造り餓鬼道を造る動物である。日々の己が身と口と意の所作を反省する時は、地獄の火に燒れ餓鬼道の苦を受べき外にゆく道なきものである。

然れども其心の奥底に潛める靈性の具ふるあり。また大ミオヤの大悲此迷子を憐れむの慈悲心より教主釋迦と現はれ、本地の慈悲を示して曰く、世のすべての子等よ、至心に我を信じ我を愛し我許に生れんと欲して只管我名を喚びて我を賴めよ、必ず光明の中に生れ更らん、との聖意かたじけなし。例へば人の子たる此肉體が生れて初めは母の顏さへ見えぬものなれども、唯啼聲を便りに母の乳房を哺められて成長せし如く、佛の子たる我等はミオヤの慈悲の面影さへ見えぬ赤子である。唯ナムアミダ佛の

啼く聲に如來の慈悲に育まれて靈に活き御子の德を成長れる終りには必ず佛に成るものと信じて一ら念佛する時は必ず如來の御育てを被りて、光明の中の人となるを得べし。

仰き願くば世の同胞衆よ、共にミオヤの慈光を蒙り同胞共に相携へてミオヤの道に向上せんことを祈る。

仰ぎ願はくば世の同胞衆よ、共にミオヤの慈光を被り、同胞共に相携えてミオヤの道に向上せんことを祈る。

◉

「あみだ佛に染むる心の色に出では秋の梢の類ならまし」とは、聖法然上人の自から彌陀の靈光に薫染して麗はしく美化したる內容の消息を洩し給へる道詠である。頃日秋の末到る處野に山に黃に紅に、錦染なす光景を眺むるに就ても、聖人の道詠を偲ばざるをえぬ。恁は秋の興感を與ふる山野の紅色は、孔夫子の天何と言ことぞ四時行はれ百物生ずと曰ひし如く、彼らは天眞爛漫に毫も私なく、天の與へ給ふ任に染なさるればこそ恁は麗はしき色を爲してをる。大ミオヤなる如來は、我ら一切衆生の心靈を麗しく染なされんが爲に、淸淨歡喜智慧不斷の光明を以て永しへに照し給ふも、我らは其靈光中に在り乍ら、只世の五塵六欲に眼に耳に汚染されて、幾年月を經ても彌陀の靈光に淨化せらるゝ光榮をなすこと能はで、來る秋も來る秋も空しく過ごし、再び得難き今日を徒らに莽しゆくこと、實に慚恥に耐へざる處。彼らは年毎に有終の

美を呈して天のミオヤの恩恵に報い奉つるに、清き同胞衆よ我らはいかにぞ受難き人身を受たる甲斐として、實に有終の美なる人生を尅果すべきや。自から反省して自己を照察し給へ。而してまた我らは何にして大ミオヤの大悲に報うべきぞ。彌陀は靈光赫々として我らが心靈を照らし給ふ。我らは聖名を稱へて聖旨の現はれを仰ぎ靈光に觸れて初めて靈に活きることを得ん。而してのち靈化の光榮を身に口に現すやうに爲て、ミオヤの聖寵に報い奉るべきものと自ら信じて、世の同胞衆に御すゝめ申す所以である。

一六

光明主義

宇宙の一の大ミオヤを信ずること。

ミオヤの光明を獲得し、光明の生活に入るべきこと。

一のミオヤを信ずる時は、一切の人類は同胞たるを信ずること。

人類はミオヤの眞の御子なることを自覺すること。

人には必ず脱却せなければならぬ罪惡の垢質あるを信ずること。

光明を蒙る時垢質を脱却すること。

此會は天の大ミオヤを總ての人々に御知らせ申したいのであります。私共は寢ても覺めても忘るゝ事能はざる一の大ミオヤをほんとうに世の同胞衆に御知らせ申度のであります。親を離れて子供は成長することはできぬ。私共の心靈はミオヤの慈悲の光明を離れて成長はできませぬ。世に一のミオヤを知らぬ爲に、ミオヤより賜りたる最貴重なる日々の時間も勢力も私事に徒らに費して居るのは實に勿體ない次第であります。私共はミオヤの光明を仰ぎて、光明の御育てを蒙るので、靈性が完成成熟するのである。例へば太陽の光を蒙りて、稻米が成熟する如くであります。故に眞實に如來の光明を蒙る時は漸々に人格が充實してきます。如何にして如來の光明を獲得できるでせう。如來の光明を蒙りて人格を日々に充たしめむと欲せば釋尊の教へ

一七

に依るべし。釋尊は敎て曰く、其光明の威神功德を聞いて日夜に稱說して至心不斷ならば意の所願の如くに光明の中に生るゝことを得べし。

一八

宗教の必要を感ぜぬ人に示す

中等教育を受け位置も相當なる或壯年の男自ら謂へり。曰く吾人は宗教の必要を認めず。宗教は愚夫愚婦をして惡を作爲しめぬ方便に過ぎずと。予語つて曰く、今聞く處によれば君は宗教の必要を認めずと言は謂ふに君は未だ宗教は人生に何なる性能を與ふべきものなりや、また人の精神には如何に宗教の必要なりやを未だ明にせず。故に斯の如くに自ら決定して得意とせるなり。是實は君未だ自己の本性を自覺せず、また人生を自覺せざる故なり。若し正しく宗教の必要なしと言はゞ君は人間にあらず、人類以下の動物に過ぎず。恐らく君は未だ宗教の必要を感ずべき機會を得ぬ爲に然か言つて居るのである。故に君にして若し能く人生の意義を自覺せば必ず宗教の必要を認め、度脱の要を感ずるに至らん。宗教と言ひ、教育と言ひ人類以下の動物には共受けたる心の資性劣拙にして未だ教育及宗教を受べき可能性を共の腦中に豫備して居らぬ故に教育または宗教の必要なき生物である。彼等は本能的に馬は馬、牛は牛自ら受けたる天資の本能を全うしてをれば天分を盡すのである。人類は動物の如くに本能のまゝに一任することの出來ぬ最も狡猾なる動物である。故に靈性を開きて動物性を高等なる理想の境に誘導するにあらざれば、牛や馬よりも智慧が進んで居るだけに惡きことをする。

動物は理想なる智慧を有せぬ故に只目前の刺戟に反應する丈けの識別である故、時間的にも將來先から先の取越苦勞もなくまた空間的に他人と我との關係を種々の方面から觀ることもまた慮ることもない。人類は智慧が進んでをる故に處世上にも他の動物よりも苦が多い。智慧が發達してをる爲に先から先の慮りがある故に苦が多く悶を重ぬる。また道德上にも智慧が進んでゐる爲めに惡いことをする。他の動物のや

一九

うに本能に任して居られぬ。意識的に惡いことをする。

然れども人類は惡いことをなし得ることに意識が發達してゐると同時に善き事も出來る。故に人間は只人類との關係のみに止まらず天の使命を重ずべき宗教心がなくてはならぬ生物である。宗教に依て研かざれば天より受けたる資性を完成することはできぬ。

今君が爲に人類と他の動物の精神に受たる資質の異る處、人類は宗教に依て研くべき本能性を具有する所以を明さん。例へば鑛物に庭の巖石の類あり。また珠玉寶石の類あり。而して巖石は力を盡して研磨すべき要なし。何となればいかに琢磨すとも光彩を發すべき資性なし。寶石珠玉の如きは能く充分に琢磨する時は本性を發揮して燦然として光を放つに至る。動物の資性は巖石に比すべく本能のまゝにて足れり。人類の精神は寶石の如くに琢磨せざれば光輝を發せず。恁くて例へば寶石を能く磨く時は太陽の光が反映する如く、人の精神が靈性開發する時は如來の心光能く反映す。彼の牛馬の如きは巖石の如くにして何に他より宗教の素養を施すも之を受くる可能性なし況や宗教の本尊如來の光明を反映すべき性能あらんや。

靈令人類なりとも若し宗教的信念の琢磨するにあらざれば心靈八面玲瓏として彌陀の靈光反映する能はず。

佛とは覺者

佛とは梵語にて譯すれば覺者と云ふ。眞實にすべての眞理を諦らかに自覺したる人と云ふことである。眞實自己を自覺すれば、自己の本源を知り得らる。自己と云ふものは本がなくてはならぬ。本源の自性を覺りたる者を覺者と名く。之を宗教的に表はす時は、眞の自己の本の大ミオヤと云ふことになる。本の大ミオヤを先づ第一に能く信知しなくては宗教心は成立たぬ。私共如來の大ミオヤの恩寵に浴しなくては有難い信仰心ができぬ。然らば何にしてこの世に最も尊き大ミオヤの在ますことが初めて

知り得られたのでありしやとなれば、この世界には釋迦尊が御出世なされて敎へて下されたのでミオヤを信知することができたのである。釋尊も本は實には大ミオヤより身を分けて此の土に出でましたのである。然れども此肉體を受けるにつけては父母がなくてはならぬ。故に父を淨飯王と云ひ母を摩耶夫人と名け、王の家に生れて幼名を悉多太子と申し上げた。國王の位を得て無上の光榮ある御身の上なれども本々一切衆生を救度せんが爲の御出世なれば王位を避けて山に入つて御修行なされた。(而して勤苦六年の御修業の結果、終に師走八日の曉に無上正覺を得たまふたのである。願はくは世の同胞衆よ、範を敎祖に取り、御敎へを信じて念佛三昧を行じ、自己の本源たる大ミオヤを覺知したまはんことを。)

光明主義に就て

ミオヤの光に淸められたる中川上人よ、吾人が主張する光明主義の御質義に對して安心の大意を演べて主義を明かにせんとす。信條の三條件を明せば、一、所求、二、所歸、三、方法、

一、所求とは、信仰の要求する所はミオヤの光を獲得て光明の生活に入るを目的とす。光明を被る時は從來の盲目的生活より覺醒して、ミオヤの光明中の人となり、現在を通じて永遠の光明に入ることを得る。人の天性は六根は染汚にて感情は苦惱である。智は無明にて意志は罪惡である。我等が生れつき有て居る弱點は自分の力にて除くことが出來ぬ。唯、ミオヤの淸淨と歡喜と智慧と不斷との光明の攝化を被りて光明中の人となることを得る。光明中にも肉體ある間は精神的に光明中に生活し命終る時は現實的に光明土の人と爲り得る即ち淨土に生るゝことである。

二、所歸の本尊、彌陀尊は絶對的の中心本尊に在まして現在未來を通じて唯一のミオヤに在せば無量無碍の光明を照して念佛の衆生を攝取し給ふ。我等が肉體は太陽の光にて活かされある如く、我等が心靈は彌陀の光明に依りて活かされてある。如來は見と不見とに係らず眞正面に在すことを信じて其照鑑の下に精神指導されつゝあることを信ずべきである。是の如くに歸命する本尊を確信すべきなり。

三、去行——方法とは如何なる方法を以てミオヤの聖意に稱ひ光明の中に攝めらるゝかとなれば、唯本願の名號を稱へ即ち念佛三昧を以てす。如來の慈悲心は我等が心に入り、我等が信念の心は如來の中に入り、見と不見とに係らず一心に念佛して如來の慈悲に同化せられんことを要す。常に如來の中に在り光明の生活を得、肉體終れば報土に生ずることを得。

要する所、光明王を本尊とし、光明名號を稱へ、光明中に生活するを宗趣とす。

（尙號を追て明すべし。）

道友某工學士の質疑に答ふ

一、永遠の生命の意義に就て

イロハの三義、何れも理論としては意義あり、斯の意を宗教意識の上に確信し、精神生活に於て實現せんことを要す。佛教に謂ゆる永生の意義を明さん。佛教の終局目的とする所は永遠の生命である。即ち生死を解脫して得る所の涅槃である。涅槃とは生死を超越したる永遠の生命、常住の平和の意義である。涅槃の體は宇宙絶對の本體、無始無終の靈體である。一切衆生の生命は此の本體を根底として分身したる個性である。然るに個體のみを我れと執して根底たる自己の全體性を覺せざるを迷の衆生とす。即ち小我を執する惑を本とし業を造り、業に善惡あり、業の因に依りて六道生死の苦を受く。生死の本たる小我は惑と業より造りたる迷妄にて無實の性であると。惑を解き業を脫して小我を滅亡して眞空無我の眞如の顯れたる涅槃を

得るを目的とする、之れ小乘の聖者羅漢證得の果である。

肉體を有し乍ら無我眞如を證して永遠の生命を得たるを有餘涅槃とす。此の間は神は永生の平和を得れども肉體自然の束縛は免れぬ。而して此の肉體の繫縛を脫したる時は眞實の永恒涅槃に入る。之を無餘涅槃とす、之れ小乘の永遠生命を得たるものとす。

大乘の永生涅槃は之と趣きを異にす。小乘の終局は眞空眞如の涅槃を證して個性なる小我を滅し生死を越ゆるを永遠平和の究極とす。大乘には小乘の究極結果の涅槃を自性の本體として其の根底の上に個性を亡さずして個性を以て全體の顯現として、凡夫の如くに小我に執せずして大我の個體として大我なる涅槃の有ゆる恒沙の功德を開顯し、大我の生命を自性の生命として、一切衆生は元同一の眞性なれば一切の衆生を度し、一切の煩惱を斷じ、一切の眞理を覺知し、個性の功德を以て全體を滿たしめ、萬德圓かに滿ちて常樂我淨の四德莊嚴の涅槃界に在て、常恆に生死海の衆生を度し究むるに至る。之を永遠の生命とす。

今光明主義の永生は我等一切衆生は絶對なる大ミオヤより分れたる個體である。然るに個體我の根底なる大ミオヤを信知せずして朦々として六道生死の身を受くるを迷とす。我等大ミオヤを信じて、ミオヤの慈悲と智慧との光明に孵化せられて心靈の復活しミオヤの子たることを信知したる時に永遠の生命を信ず。而して此の生命は全くミオヤの賜ものなれば聖意を體現するやうに全力を竭して努力す。此に至れば身は娑婆に在り乍ら神は大光明中に在りて無上の光榮と無比の靈福を感じらる。然れども身には寒熱及び飢渴の束縛は免れず。此れが爲には肉體は肉を養ふためには應分の努力すべきである。然して肉體の命終る時には、ミオヤの許に還りてミオヤ及び一切の同胞と共に涅槃常樂を享受す。此を永遠生命の意義とす。

理論的に生命の意義は哲學としての價値ありとするも實際の精神生活には價値なし、依て今は宗教意識の上に永生を自覺し永遠の光明の中に生活するを目的とす。

二、生死解脱の意義に就て

佛教の中に解脱主義と救濟主義と光明攝化との三主義あり。

初めの解脱主義は大小乘に亙りて衆生には消極的に脱却すべき惑業苦の惡素質あり。積極的には開發すべき靈的性能あり。惡質は例へば鏡垢の如く鏡垢を除き去りて珠玉の光輝を發するが如くに、衆生の惑業苦を除き去る爲に戒定慧の三學を修して靈的自覺の光明を開發し覺了と實行の究極を得道す。之れ衆生本具の靈性を開發して煩惱の惡質を解脱するの主義なり。大小の聖道門此れに屬す。

次に、救濟主義――衆生は全く無明罪惡の凡夫、自ら解脱の因なく、唯絶對的大救主の救を仰ぐ外に道なし。唯衆生は無智無力にして自己の力の及ぶ處にあらず絶對的に歸命信賴する時は必ず永遠の救を得るものと信じて、救濟せられたる上には如何に爲し給ふも自己の意を容るべきにあらず、何んとなれば本より地獄一定の惡人が如來の本願に助けらるゝものなれば唯地獄の苦を免かれ如來の助けを蒙ることなれば、唯如來に一任すべきのみ。自餘は唯あなたの聖圖に順ふ外なしと確信す。之を救濟主義とす。

光明攝化主義

斯の主義は前の兩者を合したる如く、一切衆生は本大**ミオヤ**より受たる靈性と人間より受たる煩惱との兩性を具して居る。故に靈性は具有すれども產みたての卵のやうなものにて孵化せざれば活用せぬ。故に唯人の子としては無明と罪惡と汚れと苦惱とである。若し未だ靈性を開き煩惱を靈化するにあらざれば、永遠に闇黑生死の苦を脱すること能はず。此の生死の苦を脱して永遠の常樂と圓滿なる人格とに爲らんには、**ミオヤ**の光明に攝化せらるゝの外に道なし。衆生は大**ミオヤ**を信樂して一心に念佛する時は**ミオヤ**の光明に攝化せられて靈性の開くを信心開發すと云ふ。罪惡と及び苦惱は解脱し靈化す。經に「三垢消滅身意柔輭」と明し給ふ。然して光明獲得する時は體現的に生活し、而して後命終れば**ミオヤ**の許に至りて永恆の靈福と共に靈的に活動することを期す。

已上の三義あることを御了承なされたならば解脱と救濟の意義が御解りになることならんと存じらる。

（尙再往質問の文に就ては次號に明さむ。）

小島尊宿の質疑に答ふ

一、法身を人格者と見る事は如何かとの質疑に就ては是は多くの佛教者の疑ふ所である。然るに愚衲は法身佛を人格者に信ずべきやうに一般の佛教者に承知せられんことを翼ふのである。

就ては小島尊宿よ、餘例なれども、宇宙は本一體なれども科學的、哲學的、宗教的との三面の宇宙觀ある事は御承知でせう。佛教の學者中に哲學的と宗教的との兩面を混淆して見て居る方が多くある。即ち、眞如と法身とは同一の實在なれども甲は哲學的の名にて乙は宗教的の表號である。哲學は實體を理論の對象として其の知識を得るを目的として觀る故に、理體とす。宗教は救を求むるの客體なるが故に、自己の本源なる親としても亦終局の救濟者としても人格的に觀ざるを得ぬ。子なる自分が人間なる故に其親たる法身は人格的に感せざるを得ぬ。哲學的理論の對象としては眞如と云

ふ理體に觀すべきも、宗教の信仰の對象としては人格的に觀せざるを得ぬ。既に法身と云ふ、身とは人格的の意味である。加之法身佛と云ふ、更に密家ではマカビルシャナ即ち大日如來と名けて人格的に觀てをる。哲學的では理體として取扱つてをる故に、眞如佛とか又は實在尊とか名けて居らぬ。世間の學者は實體を哲學的と宗教的との觀方を能く了解してをるけれども、佛教者には解らぬ方が多い。福來先生も云はれた、私は宇宙を絶對的に尊い人格者と觀せざるを得ぬと。尙今異教者の神に對する觀見を例せば、日本帝大に教鞭を執られたケーベル博士が神は絶對的完全なりと言ひ又神は絶對的人格なりと云ふも畢竟同じことである。何となれば前者の慨念は亦人格の概念をも含むに依てゞある。非人格神とは我等の有限なる人間的本質の最高性質さへも有せざる如き神である。從つて人間よりも貧弱なる神である。

ヘーゲルが活ける神の遍在の確信は、神は絶對的主體であり絶對的自意識である、人格的精神であると。ヘーゲルの神は佛教の法身ビルシャナ徧一切處の神と同じ意味である。斯樣な次第にて法身を人格的に見るのは宗教的である。法身佛を理體と觀ては哲學的に混交したる觀方である。

尙、佛教者の中に哲學と宗教との混じたる見解は、法身は理體にて報身は人格的であると法身に對しては哲學的に觀て報身に對しては宗教的に觀てをるが即ち誤りである。夫では終始一貫して居らぬ。若し報身を宗教的に觀るならば法身をも宗教的に觀るべきである。また終始一貫して哲學的に觀るならば、本眞如より隨緣の衆生なれば我等が自已の根底に悟入して本の眞如に證入する時は卽ち佛なりと觀る如きは一貫したる哲學的見解である。

我が愛する小島尊宿よ法身を人格的に觀るのは宗教的なることを諒し給へ。

二、既に絶體と云はゞ絶對とは相待に對する絶對の樣に思はるゝとの質疑に對して。如來は三身一如にして一方よりは全く絶對無限の靈體にして法界に周徧して遺すこと無し。一面には相待的に大小無礙の身を示して衆生の機に應現す。佛教佛身は絶對に

して亦相待應現す平等と差別何れも一方に偏するを許さず。此義華嚴經等に徧在せり。また西洋の宗教哲學の中に客體なる神の絶體無規定なることを盛に主張するあり。能く研究し給へ。

三、如來より出し我等が何故に如來に歸命すべき哉の答に謂く。本如來藏より出でし本性を有するが故に如來に歸して本居の宮都に還ることを得。如來藏より出て、衆生が歸元の眞理に迷ふが故に六道の佗鄕に彷徨して出離する能はざるなり。導師の一到彌陀安養界元來是我法王の家。また歸なん去來魔鄕に停まるべからず等の文見つべし華嚴五教章に經を引て一切衆生本法身より生じて法身に歸らざるはなしと。若本源の如來に歸命せざれば六道の迷鄕に迷はざるを得ぬ故に本覺の源に還らんが爲に如來に歸命するなり。（罪惡の淵源に就ては次號に讓る。）

四、無限者の實在は人格的に見ざるも可ならんとの答。先にのべし如く若し哲學的見地なれば眞如と云理體と見べきも、宗教は自已が苦樂を感ずる人間なるが故に之が救濟を仰ぐ對象としては人格的でなくては信賴することを得ぬ。そこが哲學と宗教と異る點である。

五、宇宙は精神でなくて物質である、是は佛教の眞言哲學の六大無礙である。また楞嚴經の地水火風空識見等の七大は本如來藏妙眞如性の一元の隨緣變現の相であるとの說に本づく。御問の物心の統一的存在より何故に二に分れし哉。是には物と心とは同一體の內外兩面現のスピノーザの說の如く是に少しの缺點はあれども多くの學者は此說を取るが如し、吾人は眞言の六大一如、楞嚴の七大一性の理に隨つて一元を主張す。

發刊の表白

謹み敬つて我が信樂する所の唯一の尊き大みおやに告白し上る。我等はもと心闇くして大みおやの在すことを識らざりき。然るに教祖釋迦牟尼佛の御教に依りて我等はみおやの在すことを信知するに至れり。我等が恩寵を被りて光明の裡に活き働きつゝあることを得たるは全く恩寵の然らしむ處と深く感謝し奉る。我等はあなたの無窮の恩を報せんが爲に聖旨を世の同胞に知らしめ、恩恵を世の人々に頒ちて共にあなたの光明の下に聖意に契ふ人となりて價値ある生活をなし、永遠の幸福を共にせんことを期し、こゝに小雜誌を發刊す。

願くは大慈の父よ、聖旨を世の同胞に頒つて聖意に違ざるやう神力加被を垂れ給へ

發刊の旨趣

良に惟みるに九蒼の無窮なる之を仰げば彌々高く之を觀ずれば益々深玄。天に日月星辰は其軌を逸せずして循環し、地には四時行はれ百物生ず。宇宙の無限なる中に過去遠々未來邈々たる中に、我等が生の微なる窈々冥々として自ら其の源を究め其奥を測るの智なく、天地萬物に細大となく所有萬物を統べ攝める造化の妙用を觀ずれば之が根本となり又、其中心となり萬物の歸趣する處の本體なかるべからず。換言すれば一切萬物は何ものにか產み出され又生育されて居るものなれば、萬物の一大本源即ち一の大みおやなくてはならぬ。我等一切衆生の大本の御親は何なるものなるか、無知なる我等知ること能はざりし。然るに我等が教祖釋迦牟尼は其のもと、本有法身無量壽佛より身を分けて此世に出給ひし聖者なるが故に自ら叫んで曰く「三界は我が有

なり其中の衆生は皆我子なり」との金言は我等一切の無明の迷子等のために一道の光を與へ給へり。我等は教祖の御教によりて獨りの大みおやの實在を信知することを得たり。誠に是れ喜びの極みならずや。釋尊は假に人間の身を受け給へども實には本有法身無量壽佛に在ます。我等は教祖の御教に依て大御親を信知することを得たのみでなく、みおやの智慧と慈悲との光明に育まれて靈性開けて正しく父と子との最も親密なる因緣により、その光明の中に意義ある生活を遂行することを得る。實に是れ人生の最幸といふべきである。大唐の聖善導は我等と御親との間に親緣と近緣と增上緣との最も强き力を以て我等を助け給ふ所以を示されてある。我等は弱きものなれば大みおやの强き力を仰がざれば正しき道を進み行くことは出來ぬ。我等が先輩（諸の聖者）はみな御親の光を享けて、世の爲め人の爲に偉大なる働きを以て御親の光榮を現はし、熱誠に時代の人々を導きて光明の下に誘引なされた。

我等はみおやを信じ、自己は實に聖子なりとの自覺を得れば一切の人々は悉く同胞であることを信解するに至らん。

尙、世の同胞諸士に告ぐ。我等は如來の子たると共に人の子である。人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殼が强く〳〵結び付て居る。是がために動もすれば自己を暗黑に引込れて惡道に陷れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして却々顯れ難い。みおやの恩寵を被むり光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに專みおやの恩寵を仰ぎ慈光に導かれんことを期すべきである。

みおやは淸淨と歡喜と智慧と不斷との光明を以て我等が暗黑より解脫し得るの御力を與へ給ふ。人生再び逢難し、一日の光陰も皆是れ御親の賜なれば、この尊き光明の中に生活を得る吾人は全力を竭して天分を果さんことを。今こゝに小雜誌を發行して我が同胞衆に頒つことは、みおやの聖意を普く世に知らしめて共に光明の下に生活々動し聖寵に報いんが爲である。願くば發起其中の微衷を諒察し給へ。

佛陀禪邸　敬白

成所作智の二面

一切の感覺態を發す性能なり。

如來作智とは一大觀念が力によりて實現せる色心萬差の特殊即ち感覺的作用なり。

鏡智は總相にして作智は別相なり。

主觀と客觀の一切の色聲香味觸の客觀的物象と、視聽嗅味觸の主觀的感性とは作智の妙用なり。

作智の二面は

天則秩序による天然と、終局に顯現する心靈界となり。甲は天然の生理機能にて、感覺と所感の境にて、即ち娑婆の五塵と五識なり。即ち凡夫の所感。乙は心靈開發して感覺すべき靈界にて、淨土の五妙境界なり。即ち聖者の所感。本法身の作智の妙用の異方面現象なり。

物理學者の、外界の刺激はエーテルの運動にして內界は神經より腦に傳へて而して感覺作用を起す。分子運動は刺激にして感覺に非ず。感覺の精神的感覺の心と外界分子の物象とは相反せる物心二系たるも、本質に於てまた共通せざるべからず。

感覺作用を物理的に略して論せば、客觀のエーテルが彈力ある振動により、電氣及機械的分子動力の刺激して視神經を傳へ視覺を起し、彈力の分子部が空氣を振動して人の鼓膜を敲ち之を聽神經より腦に傳へ聽覺となる如く、すべて五官の所能覺を作さしむ。不思議の作用は全く人の心理現象なり。

（催　眠　法）

肉眼は天然規定、生理的機制、肉的五官は天然の生理生活の必要器具にして、劣等植物の如きには生理に五感の必要なく、またすべて動物にも官能の機制は各其生理に適して成れり。

生活の目的の爲に致せるが如し故に其必要に應じて官能を變更す。また其副作用として生理に適する時は感官の快感を起し不なる時はまた不快を感ず。

其作用の理は已に述たる如し。

天眼等の五官の作用は自己の精神と自然界とは同一の觀念態。遠近を問はず、一切の個々は共通すべき理性なかるべからず。爲に個人的肉の心的動作の波靜まりて、宇宙の精神と冥合し、而して一切の個々と感應し、神通すべき、

意志の鞏固（心力を感傳せしめ心理的合一を確實にす。）

信念の强盛（必ず彼を眠らす必ず病氣を治す、）

心力感傳法は一に呼吸を丹田に攝め心を凝し一意專心に所者に心力を注ぐのみ一心不亂にして他念することを用ひざれ。

催眠法の生理的方式感覺を刺激して腦の一局部を疲勞せしめ注意力を專注せしめて催眠す。精神方式は闇示によりて催眠を催す。

宗教的信念の有るものは、彼の眼を凝視し心力を凝して專注すること約三十秒にして、彼の眼瞼が殆んど閉着せんとする一刹那に、一層心力を疑して眠れと闡示して、兩眼球を輕く壓迫して心力感傳を行ふこと十數秒、閉目せんとする瞬間に心理的連鎖を確實にす。此一刹那の虛に乘じて完全にラッホをつけるが緊要なり。醒さむとする前、手の音を三つ聞くと醒むると闡示す。

作智

作智は如來が絕對寫象の特殊的差別の相をなすものにして、感覺的形式なり。如來の性は發動性のみによりてなれども、發現せる萬物には感覺的にあらはる。絕對寫象は普編的總相にして作智は特殊的の差別體なり。如來の寫象態が人の精神の感覺性となりて、本同一の字象態なれども人の感覺機能によりて感覺を殊にす。

人のは受感性にして外界の刺激によりて受感して感覺を自發するものにして、受動的にあらず、外界の刺激を感じて之を感覺する勢力は發動なり。

人の感官機能は機制的にして器械的なれども、この感覺を可能ならしむる性力は本如來を離れて有ことなし。

機能なき如來自身には受感性あることなし。

如來は本然たる一大心靈の產出發動絕對觀念を直接に現すべき圓滿豐饒自在なる內容なるが故に即ち材料を要せず。自發自產なり。如來の絕對觀念が內容豐富にして產出的なれども、人の官機能によりて感覺となる。若し宇宙に如來の目的なく、盲目的衝動より進んで意識的有感的衝動と現はれ官感的衝動は客體の知覺即ち活動の寫象に伴はる。次に理性的意志は目的思想原理及び理性に規定せらる。理性は人間のすへて意志形色衝動及び欲望に對して常に批判選擇の務に任す。

宗教的最高等の理性は最終の開展なるを以てまだ理性開展せざる盲目的意志を無明と名づく。故に無明は積極的の心理實在にあらずして明的理性顯示せざる心理的狀態なり。是個體無明にして一切惡の根本なり。理性また顯示せざる故に。自然的基礎の

主我本能衝動が幸福主義我執の根本的人性の惡は理性の光を缺くが故に本づく。故に無明を迷の根本と爲す。

無明の形而上的根本原理は個人及宇宙が如來藏性が宇宙を開展するの順序に於てもまた然り。藏性が宇宙を開展し產出するに本質は絕對觀念態また理性態なるも、開の第一は絕對意志によりて實現せられたる客觀々念態にして宇宙には本質の理性的終局目的によつて顯示するが故に。

理性即ち一切慧は自發的無規定に開展せず。

禪定

『神通の勝業定に非れは生せず、無漏の慧根靜に非れば發せず。經に曰く、深禪定を修して又神通を得ると。心一緣に在るは是三昧相。書に曰く當に形をして枯木の如く死灰の若くならしむべしと。富貴に充堀せず貧賤に隕穫せず神を冥漠の內に栖して形を塵埃の表に遣る。故に心を一所に靡するは便ち是れ功德の叢林意を片時に散ずるは即ち煩惱の羅刹と名つく。所以に曇光釋子は猛虎を膝前に降し螺髻仙人巢禽を頂上に宿す。大士常に冥座を修す。煩惱を斷ぜずして涅槃に入り道法を捨てずして凡夫の事を現するなり。衆生心性譬へば獼猴の戲跳攀緣し歡樂奔逸する如し。目を冥し、體を束ね、心を端し息を勒むること能はず、剛强にして化し難く、慵戾にして調はず。五塵に親近して三界に流轉す。永く苦海に沈むは情慮を放散し心神を擾亂するに由る。風裡の燈、波中の月、擔漾輕動し浮游汎濫す、影既に現せず照豈明なることを得んや

六塵念に在つて亂想常に馳す、狂象の鈎無きに類し、戲猿の樹を得るに似たり。故に念々に策心し、刹々に(集)起すべし、前念皆惡遂に剋苦して塵を靜め後念善を起すべし。靜慮方に能く正うして想凡懷を革絶す。」

涅槃像の表具完成

京都　某　師　報

聖者辨榮御上人の御遺稿や、御遺墨は機多殘しくだされてはあれど、大般涅槃經にて、御涅槃像を御畫きなされた傑作は即ち今回神戸市内、共特志者により實に立派な而して落着きある表裝申上げしこの一軸こそ、全國的に考へて見ても唯一である。關東大震災の突發時に當り、齡七旬に餘る鈴木由美子刀自が、命がけで持ち出しくだされた爲めに、今回表裝し奉ることができたのであります。三島子爵御本邸にて、大震災後の追悼御別時會佛會の際、東上參加し、親しく鈴木由美子刀自の御病床を、竹内喜太郎居士と同道、御見舞申上げた。

刀自は全國會員よりの御見舞を感泣され、而して御涅槃像の輻を捧げ、何卒全國光明會々員諸兄妹に結緣してください、愚婆は最早命終も近かるべし、此頃再三お上人樣が、お見舞くだされて、此穢れ多き身を、ソロリ〳〵と撫で擦りしてくださいませ、實に心悅悅豫であります、……歡喜の涙を注ぎつゝ、後代の爲めにと託されたのであります、全國の光明會員は、唯一の御眞筆より成る、而かも鈴木刀自の命がけのこの御像畫を、唯一心寶と尊み奉りて絶對無限の光明に攝化せられし終局には　諸佛と等しき覺位を獲、大般涅槃に證入させで頂へべく、各會員相互が互ひに手を繼ぎ、心を協はせて、活き〳〵とした、信仰團結の下、お上人の御聖慮に奉答し、亦　聖上陛下の御尊慮を安んじ奉るべく、格段の御奉仕を願ひます、涅槃像に現はされてあるやうに、我光明會員の僧俗、男女、貴賤、を隔てず、娑羅樹林の下に何時も〳〵精神の交通を得て、堅固なる、而して穩健なる、信仰團隊となり以て、知悲の日月の照す下、みむねを己のが意とし、三業四威儀に、努力させていたゞきませう。この意味に於て、京都市岡崎東福の川町、公安院に於て四月二十一日、京都の會員は勿論、阪神の會員も拜參燒香、別時會佛會を修し、井上隆森師の法話ありたり。申迄もなく、全國會員が聯帶責任にて獲持すべき、御畫像なれば、京都の恩賜博物館保管を託する豫定なりと。

昭和四年五月十五日印刷
同　二十日發行
年七冊制は廢止
年拾貳冊　貳圓(郵稅共)
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區歌舞町五五
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番